

〔研究ノート〕

1909年のイギリス赤十字社「ボランティア救助部隊
(Voluntary Aid Detachments: VAD)」の誕生

黒川 章子*

「ボランティア救助組織 (Voluntary Aid Detachments: VAD)」は、戦時傷病兵救護を目的として、第一次世界大戦前にイギリス陸軍省の指導のもとに赤十字によって創設された組織である。この組織を通じて、多数の国民たちがボランティアな意志に基づいてVAD活動に参加していった。とりわけ、それまで社会的活動に参加する機会を持たなかった女性たちは、「国を守る」という大義のもとにVADに加わり、戦時医療活動に大きな貢献をした。本稿では、陸軍省と赤十字がどのような関係を築きながら、VAD設立に至ったのかを明らかにする。すなわち、VADの設立経過およびその目的と実態を検討することによって、赤十字社および他のボランティア諸組織の活動が政府や軍との協力関係の中で確立されていったいきさを明らかにする。

キーワード：赤十字，第一次世界大戦，ボランティア組織，戦時医療体制，女性の戦時活動

目次

はじめに

1. イギリス赤十字社の再編

(1) イギリス赤十字社の再編

(2) 1907年国防義勇予備軍法 (Territorial and Reserve Forces Act) の成立と国防体制

2. 「ボランティア救助部隊 (Voluntary Aid Detachments: VAD)」の誕生

(1) 「イギリスおよびウェールズにおけるボランティア救助部隊計画」

(2) VADと隊員の任務

おわりに

はじめに

本稿は第一次世界大戦の5年前に陸軍省の指導によってイギリス赤十字社のもとに組織された「ボランティア救助部隊 (Voluntary Aid

Detachments: VAD)」〔以下VADと略注〕の設立経過を明らかにしようとするものである。

VADは、1909年に戦時傷病者の救助を行うために国民のボランティアな意志による参加を基礎に陸軍省によって組織された。第一次世界大戦の始まった1914年8月1日には、男性VAD543部隊23047人、女性VAD1811部隊47196人を数えるにいたり、軍医療体制の補完役として第一次および第二次世界大戦で重要な役割をはたした¹⁾。

このVADにかんする研究は、これまで大きくわけて次の三つの視点からなされてきた。第一の視点は、戦争との関係でVAD活動を位置づけるものである。ジョン・F・ハチンソン (John F. Hutchinson) は、*Champions of Charity* [1996年] で赤十字²⁾が戦争と共に発展してきたことを検証し、一般に信じられてい

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

る「人道」「博愛」という赤十字のイメージを覆した³⁾。そのなかで彼は、イギリス赤十字社に関してその成立期から第一次世界大戦終了までの活動を紹介し、赤十字活動の一環としてVADに言及している。しかしながら、彼は、イギリス赤十字の創設期におけるVADメンバーの資格をめぐる赤十字社と他のボランティア団体との対立が存在したことを述べているものの、VADの具体的な活動および、その活動が与えたその後のコミュニティでの福祉や女性の地位への影響についてはふれていない。他方、ハチンソンと視点は異なるが、アーサー・マーウィック（Arthur Marwick）も戦時下の女性の活動のひとつとしてVADを取り上げている。彼は、*Women at War 1914-1918* [1977] で第一次世界大戦下における婦人参政権運動、ボランティア活動、工場労働など女性たちの多方面にわたる活躍が、戦後、停滞や逆行があったとしても女性の政治的社会的権利の拡大に大きな役割を果たしたと論じている⁴⁾。その中でVADは傷病者救助という形での中流および上流階級女性の国家への貢献として描かれている。

第二の視点は、VADを医療と看護の歴史の中で捉えようとするものである。ブライアン・エイベル・スミス（Brian Abel-Smith）の『英国の病院と医療—二百年のあゆみ—』⁵⁾ではイギリス医療史の中で第一次世界大戦期における赤十字の医療活動の一分野としてVADを取り上げ、看護婦不足の解消にVADが貢献したこと、しかし、VADの看護婦は正規の看護教育を受けていない者が多く、正規の看護婦との間に摩擦が生じたこと、戦争の開始と共に看護婦養成過程に女性が多数応募したが、それでも看護婦不足は解消されなかったことを述べている。

第三の視点は、ジェンダー的観点からVADを捉えようとするものである。マーガレット・マイア Margaret Miers は、*Gender Issues and Nursing Practice* [1998] で、VADが第一次世界大戦時の看護婦不足を補ったこと、VADは主に上流および中流の女性たちで構成され、正規の看護婦には自分たちの職業的地位を脅かす存在として写ったことを明らかにしている⁶⁾。しかし、社会的活動に参加する手段をほとんど持たない中流・上流の女性たちにとって、VADはそれをかなえられる大きなチャンスであったと言う。また、VADに参加した女性の多くは戦後、元の仕事に戻っていったが、訪問看護婦としての役割に興味を持ち続けた中流・上流の女性が存在したことも明らかにしている。この点に関してはVADの活動が本人のみでなく地域の福祉活動にもどのように影響をもたらしたのか興味深いところであるが、その点に関しての言及はない。

三つの視点から先行研究を紹介したが、これらの視点は相互に深くかわりあっており、アン・サマーズ（Anne Summers）は *Angels and Citizens British Women as Military Nurses 1854-1914* [1988] で、男性の仕事であった戦時下の看護が第一次世界大戦前から女性のものとなっていく中でVADに多数の女性が参加していった過程と、それにもかかわらず、戦後、ふたたび女性が社会から締め出されていく経過を、戦争（第一次世界大戦）、看護、ジェンダーという以上三つの視点を併せた複合的視点から考察している⁷⁾。

本稿ではこれらの先行研究をふまえて、ボランティア活動の一形態としてのVADを生み出した当時のイギリスの国防体制、特に傷病者救助制度が、軍と赤十字をはじめとするボラン

タリー組織とどのような関係の中で作られていったのか、そして、VAD計画の内容はどのようなものだったのかを具体的に検討することにより、陸軍省はVADに何を期待したのかを明らかにしていきたい。

「ボランタリー」という言葉のとおり、イギリス中の男女、特に多くの女性が自らの意志でVADに加わっていったが、彼女たちの参加の意志をくみあげ奨励するシステムづくりは、第一次世界大戦の5年前にすでに始まっていた。当時、徴兵制度を持たず、兵士も看護人の動員も国民自身のボランタリーな意志に依拠せざるをえなかったイギリスでは、VADへの期待は大きかった。VADメンバー募集のポスターに描かれたように、ユニフォームに真っ白いエプロン、帽子を身につけ、腕または胸に赤十字のマークをつけた女性たちはイギリス国内だけでなく、海外へも出かけていった⁸⁾。ナイチンゲールの時代と異なり、限られた階級や人数の女性だけでなく多数の女性がVADに参加していた。

VADは赤十字を通して組織されたものである以上、赤十字組織とその活動を軍との関係で考察することが必要になる。それはハチンソンが明らかにした戦争と赤十字の関係が、VADという多数の国民を巻き込んだ活動において、具体的にどのように展開したのかを検証することにもなるだろう。さらに、赤十字をボランタリー組織または非営利組織とする研究があるが、具体的に軍とどのような関係を築いていったのかを分析することで、これまでの論議に新たな視点を加えることができると思われる。

本稿は上記の課題に接近するための第一段階として、まずVADが組織される直前のイギリス赤十字社の動きからVAD誕生までに期間を

限定して、国防体制確立の過程でどのようにVAD計画が作成されていったのかを、軍と赤十字を中心とするボランタリー組織との関係に焦点をあてて考察する。

1. イギリス赤十字社の再編とその後の動き

(1) イギリス赤十字社の再編成

1870年、イギリス赤十字社の前身である「イギリス全国救護協会(British National Aid Society)」⁹⁾が創設された。その後、1899年に設立された「イギリス赤十字中央委員会(Central British Red Cross Committee)」¹⁰⁾、すなわち1904年に改称された「イギリス赤十字中央協議会(Central British Red Cross Council)」¹¹⁾と並立状態となったが、1905年「イギリス赤十字社(British Red Cross Society)」¹²⁾へと合併再編された。赤十字社の総裁となったアレキサンドラ王妃 Queen Alexandraは、同年7月17日、バッキンガム宮殿で開催された発会式で、再編された赤十字社の目的を以下のように指摘した。

ボーア戦争以来、私が総裁を務めているイギリス赤十字中央協議会をより実際的かつ堅固な基盤をもつ組織に再編したいと考えていました。

それ故、イギリス赤十字中央協議会が、優れた軍人であった故ウオンテッジ卿 Lord Wantageによって創設されたイギリス全国救護協会と手を結び、「イギリス赤十字社」というひとつの名称のもとに合併するのに同意したことを私は非常にうれしく思います。

従って、私は、この新しい組織が会員で構成される連合体の上に築かれ、赤十字社の会員と提携者は帝国全体のすべての階級から募集されるべきであると提案します。

赤十字社は完全に自由意志に基づくものであり、

陸軍および海軍省と関係は持つけれども平時にはこれらの省から完全に独立して組織され活動することになるでしょう。しかし、当然のことながら、戦時には海軍及び陸軍の指揮下に入らなければなりません。

従って私は今、この偉大な事業を遂行するために私を応援してくれるよう、帝国の全女性に訴えます。これは本質的に女性の仕事です。そして、これは戦時に困難な義務を遂行している我が勇敢で偉大な陸軍及び海軍を支援することのできるひとつの、否、唯一の方法なのです¹³⁾。

王妃のこのスピーチは短いですが、その後の赤十字運動にかかわる重要な問題を提起していた。第一に、赤十字社がイギリスの植民地や保護領をも含めて大英帝国全体のすべての階級から、その会員やボランティアを募集しようとしていたことである。つまり、これまでの一部の特権階級の排他的な赤十字から一般国民を巻き込んだ組織へと転換がはかられたのである¹⁴⁾。第二に、戦時には軍の指揮下に入るが、平時には独立した活動を展開すると宣言していることである。平時の活動の必要性和軍との距離にかんじて、それ以前より長い間議論が続いていたが¹⁵⁾、ここで赤十字が戦時には軍の指揮下に置かれる事が明確になった。しかし、平時の独立した活動の内実はまだ明らかではなかった。第三に、赤十字の活動に女性の参加を訴えていることである。この活動への参加は「本質的に女性の仕事」であり、「陸軍および海軍を支援できる唯一の方法」とであると呼びかけている。これは、この数年後、VADとして具体化される女性の赤十字活動への公式の最初の訴えであり、このことはすなわち、女性の戦争への動員を意味するものであった。短いスピーチではあったが、その内容は再編された「イギリス赤十字社」の目的を端的かつ的確に表現したものであったと

いえる。

しかし、多数の国民、特に女性を赤十字の活動に参加させるための具体的方針はまだ確立されていなかった。赤十字執行委員会は陸軍省と頻繁に手紙のやり取りを行い、自らの立場と活動内容にかんして交渉を行ったが、1905年末、以下の点で合意に達した。すなわち、「赤十字地方支部の役割は、メンバーを登録し、資金を集め、戦時の支部救助活動を決定すること」¹⁶⁾になった。1906年7月、赤十字協議会は女性評議委員会が州支部組織の設立に着手することに同意し、州の総監（Lord Lieutenant）の妻たちの献身的な活動が展開された。こうして1907年4月にはイギリスの4つの州を除くすべての州に赤十字支部が設立された。ウェールズでは3つの州、アイルランドでは32の州のうち12に設立され、2つの州にもつくられた¹⁷⁾。スコットランドでは聖アンドリュー救急車協会（St. Andrew's Ambulance Association）¹⁸⁾がスコットランドにおける赤十字支部として位置づけられ、32の州に支部がつくられた¹⁹⁾。赤十字支部が次々と設立されていく中、1907年6月にはイギリスの赤十字社再編を祝ってロンドンで第八回赤十字国際会議が開催された。しかし、イギリス赤十字社の再編を祝うより日露戦争に勝利した日本の戦時医療体制に各国の関心は集中した。特に、日露戦争時に視察に行ったイギリスの軍と赤十字社は、日本のよく訓練された優秀な看護婦部隊を理想的な姿と考えていた²⁰⁾。こうして日本の戦時医療体制、特に女性の救護活動は、後にイギリスのVAD計画に大きな影響を与えていくことになった。

(2) 「 1907 年 国防義勇予備軍法 」 の成立と 国防体制

戦時における軍とボランタリー救助組織の協力関係に新たな可能性を開いたのは、1907年8月2日に成立した「1907年・国防義勇予備軍法 (Territorial and Reserve Forces Act, 1907)」である。この法律は徴兵制を敷いていなかったイギリスが、新たな防衛体制として14の騎馬旅団 (mounted brigades)、14の師団 (divisions) および騎兵中隊 (army troops) による国防システムを確立しようとしたものだったが²¹⁾、「学校を終えると入隊することが義務であるという感覚を持たされていた成人男子は、州協会によって組織された国防義勇軍に加わっていき、また、『土曜の夜の兵士 (Saturday-nightsoldiers) 』というボランタリー軍は国防義勇軍として改編されていった」²²⁾。国防義勇軍は国内で侵略に備えるためにつくられたが、赤十字執行委員会議長、トレヴェス (F. Treves) はこの新しく生まれた軍隊と赤十字との間で、仕事の内容や範囲に関して整理が必要だと考えた。そして、陸軍大臣ホールデイン (R. B. Haldane) と軍医療部隊長官キーオウ (A. Keogh) もまた、国防義勇軍と赤十字の医療活動を結びつける必要性を痛感していた。こうして11月27日、赤十字執行委員会と陸軍大臣との会議が陸軍省でもたれ、赤十字は軍から提案された以下の仕事を引き受けることに同意した。それらは、予備の宿舍、必要な設備の用意、14カ所の国防義勇軍総合病院のために働くおもに男性によって構成される要員の確保、輸送機関の確保とともに傷病兵および食糧の輸送の組織化であった²³⁾。

赤十字の担うべき仕事が明らかになった後、1908年5月4日、陸軍省は赤十字と国防義勇

軍の関係及び活動内容を各州の国防義勇軍に徹底するために、国防義勇軍長官あてに通達覚え書き (Circular Memorandum No.31) を送った。国防義勇軍の医療制度は以下の三段階に分類されていた。「第一段階の医療救助は戦闘部隊の中で行われるものであり、担架運搬者とともに軍医が配置されること、第二段階は傷病者を総合病院へ移動させるまでに応急処置を行うための野戦救急車部隊であり、それらは師団や旅団に属すること、第三段階は、23の総合病院を設立して各病院には520のベッドを確保し、病院のある町の最も優秀な医者や外科医がスタッフとして採用されること」²⁴⁾となっていた。しかし、陸軍省はこの医療制度だけでは緊急の事態に対応できないとして、覚え書きの中で新しく再編された赤十字の各州支部と連携して仕事を行うよう訴えた。

赤十字の活動については、軍評議会は現段階でとした上で以下の6項目の活動を提起した。すなわち、総合病院となる建物の確保、総合病院の設備の確保、平時に常時確保されている訓練された医療スタッフを補完するために、総合病院の要員を確保すること、傷病者の輸送の手配、兵站組織での軽食の提供、将校や兵士のための回復期療養所 (Convalescent Homes) の設置²⁵⁾であった。

軍評議会は、国防体制に国民を参加させる場合、赤十字の州支部がその組織化を行う最適者だと考えた。それは、軍が直接国民に戦争への協力を訴えるより赤十字を通す方が有効であると思われたからである。戦闘をしている軍が傷ついた兵士を看護するより、「中立」「人道」を掲げる赤十字がボランタリーな意志で救護活動をする方が国民の信頼を得られるというわけである。軍は、州によって戦争準備の規模は異

なったとしても、国防軍州協会（county association）と赤十字が互いに協力しあい、赤十字の活動を支援することを国防義勇軍長官に強く要請した。この覚え書きは、「1907年国防義勇予備軍法」によって国内防衛のための義勇軍が設立されたことを受けて、医療に関して赤十字と国防義勇軍との連携をすすめる、戦争準備、特に傷病兵の看護体制を具体化し全国に徹底しようとしたものだった。

赤十字は新しく生まれた国防義勇軍の任務と赤十字自らの果たすべき任務との整理を軍当局に求め、それを受けて軍当局は赤十字の活動を提案した。赤十字はその再編当初から、積極的に自らの任務を軍に提案していたことになる。軍はその一部を受け入れたり修正したりしながら、国防体制の強化のために赤十字と交渉を重ねた。そして最終的には軍の意向を通していった。しかし、それはある意味では避けられないことであった。というのも、国防体制全体を把握していたのは当然、軍であり、赤十字はもっとも重要な組織の一つであったとはいえ、あくまでも軍の統括する国防体制の一翼を担っているにすぎなかったからである。総合病院や輸送体制がどの程度必要なのか、医療体制のどこが不備なのか、知ることができたのは軍のみであったろう。赤十字の最大の関心は、その設立当初から、軍から提起された任務を他のボランティア諸組織といかに分担するか、その際、それらの組織との関係はいかにあるべきか、に向けられていた。戦時傷病者救護組織は赤十字だけでなく、赤十字社が再編された後も聖ヨハネ救急車協会（St. John Ambulance Association）²⁶⁾や聖アンドリュー救急車協会が独自に軍と関係を持っていた。赤十字は常に唯一の戦時救護組織としての地位を確保しようとしていたが、そ

れはかなわなかった²⁷⁾。軍は他の組織と長年にわたる関係を築いてきており、いくつかの組織と並列的な関係を維持することの利点を知っていた。これこそ、イギリスのボランティア組織と当局との関係の特徴づけている点であった。多くのボランティア組織が生まれ自主的に活動を展開し、当局はそれを奨励するか、奨励しないまでもその存在を容認する。しかし、必要な時がくれば当局は諸組織を集め論議をして、集団の交渉結果として諸組織およびその活動を整理し、当局にとって有利なように再編成しなす。特に戦時には救護組織は軍の指揮下に入ることがジュネーヴ条約で規定されて以来²⁸⁾、赤十字は平時における戦時救護活動の準備段階も含めて完全に軍の指揮下におかれることになった。しかし同時に、軍からの提案に無条件に従うのではなく、赤十字からの会議の開催要請、異議申し立てや修正案の提示も可能であった。ボランティア組織の創設時の主体性、活動の展開における自立性、それらを当局は認めつつ必要になれば体制に取り込んでいく。しかし、取り込んだ後もボランティア組織の自立性を完全に奪うのではなく、協議を経る中で当局の意向を浸透させ、交渉と協議の過程で合意に達する方向を探っていく。赤十字と軍との関係も同様であり、両者の間に交わされた多くの手紙がこのことを物語っている²⁹⁾。従って、赤十字は戦時には完全に軍の指揮下におかれることになったが、そのことだけで赤十字がすべての自立性を失ったとみるのは正しくないだろう。むしろ、国防体制を確立しようとしていた軍と効率的な戦時傷病者救護活動を目指していた赤十字が同じ目的に向かって協力関係を築こうとした過程とみることができる。5月4日の陸軍省からの国防義勇軍長官あての通達覚え書きを受けて、

赤十字執行委員会は同年6月22日、「動員の際の国防義勇軍を支援するための赤十字各州支部が行うべき活動」という覚え書きを赤十字各支部に送ったが、これも軍評議会の承認を得たものであった³⁰⁾。覚え書きの内容は赤十字執行委員会が考案したが、軍の許可なしには送付できなかった。こうして、「国防義勇予備軍法」の成立を契機に軍は各州長官に、赤十字は各支部に、それぞれ覚え書きを送り、陸軍省、国防義勇軍、赤十字の間に新たな協力関係が構築され、国防体制が強化されていった。

国防義勇軍の編成、赤十字の任務の明確化という国をあげての国防体制づくりによって、これまでおもに男性が担っていた戦時傷病兵の看護の仕事を女性も担っていこうとする試みが相次いだ。アン・サマーズは前述の著書の中で、イギリス各地で既存の組織の一部として、または個人として、積極的に活動に参加する女性たちを描いている。赤十字協議会のメンバーや州長官の妻、聖ヨハネ修道会の女性たちは国防義勇軍看護部隊の予備隊として「女性救助部隊 (Women's Aid Service)」の設立を提案していたが、1908年6月、国防義勇軍看護婦部隊が公式に発足した。「1907年にはすでに応急処置看護祖国防衛団 (First Aid Nursing Yeomanry Corps: FANY) によって少女のための組織、イズリングトン訓練部隊少女祖国防衛団 (Islington Drill Brigade Girls' Yeomanry) も創設されており、少女たちは青の乗馬用スカートにブーツ、黄色のサッシュ、顎ひものついた赤と青の帽子に身をつつむ、強く有能な騎手」³¹⁾であった。また、「FANYの2人の女性メンバーはFANYを離れて二つ目の医療部隊、傷病兵女性護送団 (Women's Sick and Wounded Convoy Corps) を設立し、1909年初頭には、

チェシャー義勇連隊の兵士の家族の要請で聖ヨハネ救急車協会が〔応急処置と看護の〕訓練コースを組織し、ロンドンでは帝国防衛委員会の指導者の1人であったエシャー子爵夫人 (Viscountess Esher) が同様のコースを開催した。」³²⁾ スコットランドにおいても、1909年には女性たち自ら応急処置や担架運搬訓練に励んでいた³³⁾。

女性たちは堰を切ったように看護、特に応急処置という仕事を担うための訓練に情熱をもち始めた。それまで一部の女性のものであった看護という仕事、そしてそれを通しての社会参加に、多くの女性たちは自分たちのエネルギーを有効に使う道を見い出した。国家防衛に国民が各々の役割を果たすことを求める時代の風潮が、女性たちの熱意をいっそう駆り立てた。軍医療部隊の中には、女性たちの看護訓練への参加という事実の中にそれ自体の価値だけでなく、全国民を戦争準備へと行動させる契機が潜んでいることを理解している者もいた。1909年3月12日、軍医療部隊長官、キーオウは、陸軍大臣ホールデインの姉妹、エリザベスへあてた手紙の中で、女性たちの看護訓練を求める運動の重要性を認識していなかったことを打ち明けながら次のように述べている。「〔女性側からの応急処置を学ぶためのクラスの組織化要請という〕運動の価値を認識できなかったのは完全に私の過ちです。というのも、それが固有の意味があるというだけでなく、国中の女性たちが国防義勇軍に加入し、そのことによって彼女たちの夫や兄弟や息子が国防義勇軍に加わることを促進する機会となったように思えるからです。もし、我々が注意深くことを進めるならば、大規模な大衆〔動員〕運動を始めるきっかけとなるでしょう。」³⁴⁾

キーオウはこの問題を国防医療看護部隊の諮問協議会に提出し、「祖国防衛のための女性組織の拡大」を主張した³⁵⁾。キーオウは国防医療体制の不足を女性の組織化によって補完しようとしたが、女性の愛国的運動の高まりはキーオウの計画の実現化の根拠となるものであった。1907年の「国防義勇予備軍法」の成立以来、わずか2年の間に、多くのボランティア組織と女性が祖国防衛という仕事に熱狂的に参加していった。

2. 「ボランティア救助部隊 Voluntary Aid Detachments: VAD」の誕生

(1) 「イギリスおよびウェールズにおけるボランティア救助部隊計画」

1905年の赤十字社再編、1907年の「国防義勇予備軍法」の成立を経て、国防体制および戦時医療体制の整備が進んだが、国防義勇軍長官は戦時医療体制の不備、すなわち、傷病兵を一カ所に集め必要な手当を行う場所へ彼らを搬送する体制の欠如を指摘し、その改善を要請した。陸軍中佐マクファーンソンから日本の戦時医療体制に関する詳細な報告を受けていた軍もまた体制の不備を認識していた。日本の戦時医療と同様の体制をつくることは軍にとって緊急の課題となっていた。こうして、1909年8月16日、陸軍省によって「イギリスおよびウェールズにおけるボランティア救助部隊計画 (Scheme for the Organization of Voluntary Aid in England and Wales)」が発表された。

計画はVADの起源、必要性、組織体制および責任の所在を含む15項目の概要と29項目におよぶ具体的活動に関する細目から成り立っていた。概要の全文は以下の通りであった。

1. この計画はすでに諸外国に存在している組織になったものである。
2. 連合王国の人々は、本国における戦時傷病兵へのボランティアな救助の必要性を完璧に理解している。
3. 戦時傷病者を救助するにあたって、救助組織は独自に行動する傾向がある。しかし、すべてのボランティアな救助が統合されないならば効果はあがらない。
4. 計画では、州の機構を利用することになっている。というのも、州の機構の上に国防義勇軍が編成されているからであり、赤十字も州の機構を基礎としているからである。
5. したがって、州協会が州のボランティア救助組織に責任を持つ。
6. 各州協会は、この計画に規定されている内容に則し、赤十字を通して「VAD」を組織する。また、各州のVAD (VADの数に制限はない) は州長官の指揮下に入り、各VADは戦時の状況に応じて野戦病院、休息所、救急列車の要員として利用することが可能である〔図1、図2参照〕。
7. したがって、各VADはこれらの機能を果たせるような方法で訓練されなければならない。
8. VADの訓練や装備は赤十字がよいと考える方法で行われる。しかし、負傷者の宿舎や輸送を即座に手配したり、総合病院に運ぶまでの一時的手当や処置を行うのに、VADが地域の物資を利用できるように計画されるべきである。したがって、男性部隊は特に負傷者の運搬訓練を行い、女性部隊は食糧の準備や看護の訓練を行うことになるだろう。
9. VADの効率性に何等かの統一性を持たせるために、軍当局による年次または他の方法による点検が必要である。また、各VADメンバーの報告が、VADの各州長官によって州協会を通して定期的に最高司令官に提出される〔図4参照〕。
10. 戦時における国防義勇軍の傷病者の避難は、イギリス陸軍医療部隊の将校、ないしは、この任務に指名された他の将校の指揮に従う。そしてVADは将校の自由裁量のもと、その要

請に基づく指揮下に置かれる。

11. もし州協会が、戦場救急車と総合病院の間の医療サービスのギャップを埋めるためのVADの組織化に失敗した場合、その事実を最高司令官に報告しなければならない。
12. 総合病院にかんしては、州協会は自らまたは赤十字を通じて、管理責任軍医(administrative medical officers)、総合病院に責任を持つ将校(officers commanding the general hospitals)、管轄区の衛生担当将校(sanitary officers)と協議して、必要な建物を選ぶ手はずを整える。そして、その建物をどのように病院として利用できるようにするか、計画がたてられなければならない。組織婦長もこの協議に加わる。
13. 総合病院の設備の目録を作成しなければならない。州協会は設備を整える仕事を赤十字に委ね、要員の準備ができることを確認しなければならない。
14. 総合病院に要請される補助要員は、この目的のためにのみ動員されるVADから得られるはずである。
15. 負傷者が総合病院の空きベッド数より多くなるかもしれない。したがって、回復期療養所や兵站部の設立、総合病院の拡大が計画され

る必要がある。州協会は赤十字に、平時から回復期療養所や補助病院の設設計画を提出するよう求める責任がある³⁶⁾。

こうしてVADは、組織体制としては陸軍省を最高統括機関として、州協会または赤十字を通して組織されることになった。州協会も赤十字も各州に支部を持っており、軍はそれらの組織を活用して国中にVADを設立していこうとしたが、それは最も効率的な方法であった。また、州長官から州協会を通してVADにかんする報告が軍最高司令官に提出されることになり、ボランタリーな救助活動の統合がめざされた。

VAD計画は、すでに見たように、1908年5月4日の陸軍省の覚え書きに示されていた赤十字に期待された6項目の活動の具体化であった。マクファーソンが日本をはじめとする諸外国の優れた戦時救護組織の活動を研究し、イギリスでも同様の体制を作る必要を痛感したとき、彼が真っ先に依拠しようとしたのは、イギリスにおけるボランタリーな運動の伝統と実際

図1 戦場におけるVAD

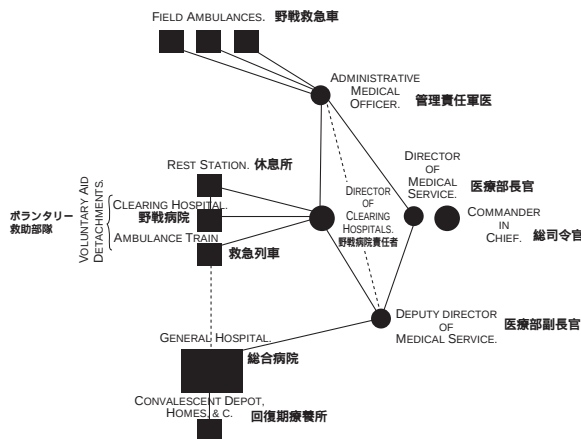
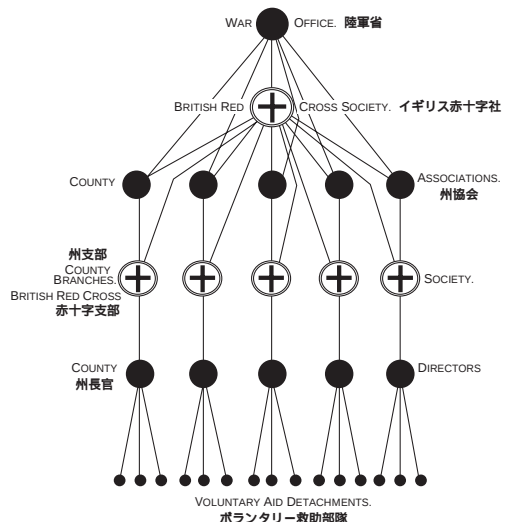


図2 赤十字VAD組織



出典) The Scheme for the Organisation of Voluntary Aid
in England and Wales (London: HMSO, 1909)

出所: 図1と同じ

にすでに存在していたいくつかのボランティア救助組織であった。「…人々は…戦時傷病兵へのボランティアな救助の必要性を完全に理解している」（項目2）と述べられているが、この背景には国民のボランティア活動の伝統が戦時という緊急時に大きな力を発揮するだろうという軍の確信があったはずである。また、ボランティア救助活動の統合の重要性が指摘されているが、これは以前から問題となっていたボランティア諸組織間の反目、競争、および活動の重複、混乱を避けるためのものであった。VAD計画は、その骨格は諸外国の戦時救助組織からとられたものであるが、組織化に関してはまさしくイギリスのボランティア活動の伝統に依拠して行われようとした。

概要で計画の背景と大枠が明らかにされ、29に及ぶ細目では具体的にVAD活動の内容が示された³⁷⁾。戦時医療体制の不備を克服するためにVADに課せられたのは、荷馬車をはじめとする兵士を搬送するための車両、搬送途中の休息所や避難所、そこでの軽い飲食物と宿舎、そして最終目的地である総合病院や他の医療施設および回復期療養所、各場所で働く要員、すなわち、傷病兵の搬送手段、搬送途中の施設、医療施設、要員の確保であった。兵士を戦闘に集中させるには、負傷したり病気になったりしたときに十分な手当が受けられることを保証することが必要であった。それは徴兵制を持たず、すべての兵士が自らの意志で戦闘に参加していた当時のイギリスにおいては切実なことであったに違いない。1900年代に入って国を挙げての国防体制づくりの中で、これまでみてきたように国民の意識や熱意も高まっていたとはいえ、傷病兵が手厚く看護されると信じることによって兵士本人のみでなく、彼らの妻や母や姉

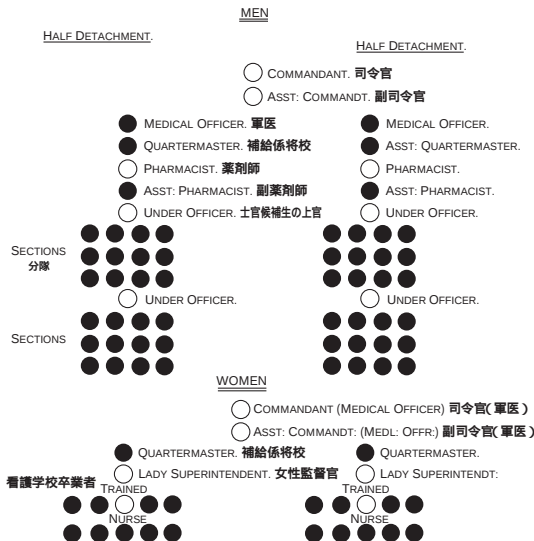
妹も安心して彼らを戦場に送り出すことができたであろう。そのためにこそ女性が必要であった。「女性の本質は人々を世話し、愛情を注ぎ、献身することであるといわれ」³⁸⁾、実際の看護活動とともに戦争の恐怖を和らげる役目も女性たちは担った。また、軍にとっても貴重な兵士を迅速に回復させ戦場へ送り返すことは最も効率的なことであった。VAD計画は兵士を確保したい軍にとって必要であったばかりでなく、兵士および彼らを送り出す家族の士気を鼓舞するためにも不可欠なものであった。

（2）VADと隊員の任務

こうして、これらの任務を果たす部隊として、「イギリス赤十字のVAD」が各州に設立されることになった。次に、細目に従ってVADの構成と任務などについて見ておこう。

VADは、日本赤十字の救護部隊とドイツのボランティア救助組織同様に、男女別に組織された。細目6で、図3のように男性部隊は、司令官1名、副司令官1名、軍医2名、補給係将校1名、副補給将校1名、薬剤師2名、副薬剤師2名、士官候補生の上官4名、隊員48名で構成された。女性部隊の構成は、司令官（軍医）1名、副司令官1名、補給係将校1名、副補給係将校1名、女性監督官2名、隊員20名（うち、2名は看護学校を卒業した看護婦 trained nurses）から構成されることが明記された。細目10では、男性部隊は特に、道路による輸送手段の用意、地方にある既存の建物の野戦病院や避難所への改造、戦場近くでの軽傷者のための病院設立に動員され、少なくとも一つの隊は野戦救急車を担当している野戦病院の責任者のもとに置かれることが決定された。細目12では、男性隊員は担架運搬については完璧に訓練

図3 ボランタリー救助部隊 (VAD)



出所：図1と同じ

され、看護士に関しても、一部の隊員は事務や衛生兵として訓練を受けるとされ、各部隊の中には大工や機械工も必要であるとされた。項目11では、女性部隊の任務が以下のように決められた。鉄道休息所の設立、避難中の傷病者への飲食物の提供、移送が困難な患者に対して避難所や臨時病院での一時的責任を負うことが任務となり、女性たちは調理や病人食の用意だけでなく、鉄道の駅近辺の適当な建物を患者用の病棟に手配する方法や看護についても訓練されることになった。女性部隊の半分は救急列車の任務につく可能性があり、一部隊は男性部隊が準備した野戦病院で看護と調理にたずさわることになった。

州協会と赤十字が共同でVADを組織することになっていたが、細目16で州協会がその責任をはたせないときは赤十字のみにその仕事が委ねられることになり、赤十字の州支部は州で組織されたVADの数を半年ごとに州協会に報告し、これらが地区司令官、最高司令官を通じ

図4 州への半年ごとのVAD報告書の書式

備考	隊員数										司令官の名前と住所	組織された場所	性別	登録番号 (陸軍省による)
	合計	その他	事務員	機械工	担架運搬者	看護婦	女性監督官	下士官	副薬剤師	薬剤師	補給係将校	軍医		

出所：図1と同じ

て陸軍省へ提出されることになった。報告書の形式は上記〔図4〕のようなものであった。

各部隊の司令官名および住所と組織された場所の報告が義務づけられ、陸軍省による登録番号がつけられた。この報告書を見ると、軍が全国のVADの部隊数および部員数を把握しようとしたことが一目瞭然である。組織されたVADは、細目18で主として以下の三つの機能を果たすことが求められた。第一に、もし戦闘部隊の近辺にいるならば野戦病院を設立すること、第二に、臨時病院、休息所、傷病兵を集める場所、避難所を設立すること、第三に、これらの施設の設立に先だって、また、より戦場に近いところで、野戦病院への補助的救助を行うことであった。そして、これらの機能を果たすために、細目19で、すべての州は多数のVADを組織すること。組織者はまず、他の国々の同様の組織の詳細をよく知ること。そして、(a) 傷病者に必要な装具を身の周りのもので製作する方法、(b) 応急処置と看護、(c) さまざまな活

動の实地訓練，に関して頻繁に講義を行うことが重要であるとした。ここで興味深いのは，組織者に他国の救護組織についての知識を得よう指示していることである。軍がいかに日本をはじめとする他の国々の救護組織から学ぼうとしていたかよくわかる。

細目20では，個々のメンバーの資格について述べられ，VAD入隊希望者が聖ヨハネ救急車協会の応急処置と野戦看護証明書を所有できるよう州協会が手配するべきであるとされた。細目23では，ユニフォーム，腕章について規定された。メンバーは特別なユニフォームを着る必要はなかったが，身分証明書が発行され，対戦国に認識されるように赤十字の腕章をつけることが決定された。

計画の最後の二項，細目28と29では，VADの由来及び目的を確認している。細目28では，この組織が国民を動員するために最も優れ，かつ実行可能な計画であることがすでに証明されている日本とドイツの組織を参考にしてつくられたことが明記されている。また，ボランティアな救助に依拠する理由として，そのことがイギリス中のすべての階級によって承認されていること，そして男女，特に女性の戦時医療体制を補完する運動がいたる所に存在していることをあげている。しかし，統合するシステムや組織がなく，運動が有効に活用されないままになっている状況を描いている。そして最後に細目29で，州協会が責任を持って赤十字によるボランティアな努力を組織化し，緊急の課題となっている国防義勇軍の医療組織の不足を埋めることがこの計画の目的であることが確認された。

最後に，以上の細目の内容から陸軍省がVADに期待していたことを整理してみたい。

まず第一に，VADの任務としては野戦病院，臨時病院，休息所，避難所の設立とそこでの応急処置，看護，担架運搬，事務，衛生関係の仕事，調理，すなわち，傷病者への看護活動と部隊の活動を支える日常生活への援助が期待されていた。男女の任務は分担されていたが，実際にはVADの約三分の二を女性がしめたことにより，女性も担架運搬の訓練を行い，自動車の運転も行うなど男性の仕事にも関わった。第二に，一つの部隊の人数は男性部隊の方が多く，軍は男性部隊を重視していたように見えるが，実際には男性部隊を集めるのは困難であった。というのも40歳以下の成人男子は兵士として戦闘に参加することが求められていたし，現実には多数の男性が兵士となっていた。それにもかかわらず，これだけの人数の男性を集めようとしたのは男性を残らず組織しようという意図の現れであった。イギリスの戦争史上，初めて一般の女性をVADという形で組織したことと同じく，軍は，男性も一人残らず動員し，国を挙げて全国民を戦争に参加させるための手段としてVADを位置づけた。こう見てくると，VAD設立計画の目的は，VADを赤十字を通して組織し，陸軍省が全体を統括する戦時医療体制を確立するということにとどまらず，全国民を戦時体制に組み込んでいく仕組みを作り上げることであった。

おわりに

国防医療体制の不備を国民，特に女性を組織することによって補完しようとした軍の意図は，VAD設立として実を結んだ。振り返れば，イギリス兵の体力の低下，戦時医療体制の不完全さは，典型的な帝国主義的侵略戦争であり，

イギリスにとっては初めての総力戦であった1899年から1902年にわたる南アフリカ戦争以来明らかたことであり、その改革は緊急の課題であった³⁹⁾。

1902年に日本と同盟を結んでいたイギリスにとって、1904-5年の日露戦争における日本の戦時医療体制は衝撃であった。陸軍中佐マクファーソンは満州視察後、陸軍省に日本の戦時医療組織に関する報告を提出した。彼はまず、大衆の共感を利用する日本の優れた方法に注目し、戦時の赤十字の活動が軍当局によって注意深く決定され、それが赤十字社によって忠実に愛国的に実行されていること、3年間の看護婦教育の優秀さと卒業後も戦争になれば看護婦たちは「赤十字救護班」に組織されることに感銘を受けた。この部隊は、医者2名、会計係1名、薬剤師1名、看護婦監督官2名、看護婦20名で構成されていた⁴⁰⁾。この部隊の構成メンバーおよび人員数がVADに影響を与えていることは明らかである。女性救護班の任務は、第一に軍病院、病院船での看護、第二に包帯の用意と応急処置、第三に戦場から病院へと傷病兵を運ぶための鉄道に沿った休息所、駅の食堂の設置であった。日本赤十字社の戦時女性部隊の任務はそのままイギリスのVAD女性部隊に引き継がれた。マクファーソンの目には日本のこのシステムこそが戦時における女性の活動の典型であると写った。そしてこれが日本の国民の共感を呼び、愛国心を鼓舞したと考えた⁴¹⁾。マクファーソンは日本赤十字社の救助組織が中央集権的であり、日本では他の組織が存在できなかったことも知っていた。救助組織の形態や活動内容は日本赤十字社の救助組織と同様のものを構想したが、イギリスで日本のような中央集権的組織をつくることは考えていなかった。

彼は日本にはなくイギリスに存在するもの、すなわち、多くのボランタリー諸組織と人々の中に伝統として定着していたボランタリー活動に依拠しようとした。聖ヨハネ救急車協会、聖ヨハネ救急車部隊、軍看護予備隊、兵士および水兵救助協会 (Soldiers' and Sailors' Help Society)、聖アンドリュー救急車協会など赤十字以外にもいくつかの組織が救護活動に携わっていた。軍にとっても、イギリス社会の中に深く根をおろしているこれら諸組織の力を無視することは不可能であり、また、得策でもなかった。

したがって、これまでの分析からも明らかに、このVAD計画を軍による上からの一方的な方針とみるのは間違いである。確かに、軍は国防体制とその一環であるVAD計画に関して主導権を握ってきたが、常に赤十字をはじめとする諸組織の同意を得ながら進めてきた。VAD設立計画は、すでに活動していたボランタリーな救助組織や運動に全国民を巻き込み、迫りくる総力戦を戦う体制を作るためのものであった。そして、その体制づくりの中で、ボランタリー諸組織をより効率的に活用することが目指された。マクファーソンは、日本赤十字社の救護活動に感銘を受け、同様の組織の設立を思いついた時、すでに存在したボランタリー諸組織と国民の中に伝統として根付いていたボランタリー活動に依拠しようとした。彼がイギリスの有利な条件として思い描いたボランタリー組織とその力は、このような形で戦時救助活動へと組み込まれていった。VAD計画とは、イギリスの国防体制の一翼を担う戦時医療体制をイギリスの伝統であるボランタリー諸組織の活動と国民のボランタリーな意志に依拠して補完しようとするものであった。そしてその活動は

多くの女性たちによって担われ、1905年の再編されたイギリス赤十字社発会式でアレキサンドラ王妃が国民に向けて「これは本質的に女性の仕事です」と訴えたように、まさしくイギリスにおける「女性の戦時活動」であった。1910年末には8000人、1912年当初には約2万6千人、第一次世界大戦前には約5万人の女性たちがVADに参加していった⁴²⁾。

注

- 1) W. G. Macpherson, *Medical Services General History, vol.1: Medical Services in the United Kingdom; in British Garrisons Overseas; and During Operations against Tsingtau, in Togoland, the Cameroons, and South-West Africa* (London: His Majesty's Stationery Office, 1921), p.56. 第一次世界大戦後の1919年10月1日には、男性VAD902部隊4万1155人、女性VAD3015部隊8万5391人にまで増加していた。
- 2) 赤十字は次のような経過を経て誕生した。1828年スイスのジュネーヴに生まれたアンリ・デュナン Henry Dunant は1859年、自らの事業のために北イタリアのソルフェリーノを訪れ、イタリア統一問題をめぐるフランス・サルジニア連合軍15万とオーストリア軍17万が激烈な戦闘を繰り広げている戦場に身を置くことになった。デュナンは自ら現地の女性たちを集め、負傷兵の救護活動を組織していった。この体験の3年後に書かれた『ソルフェリーノの思い出』で、デュナンは戦場で苦しむ兵士の姿とともに「負傷兵のための救護組織」の創設と「国際的な協約」の締結を訴えた。これが赤十字の原初的姿であった。『ソルフェリーノの思い出』はヨーロッパ各国で大きな反響を呼び、デュナンは志を同じくする人々とジュネーヴで「国際負傷軍人救護委員会 International Committee for the Assistance to Sick and Wounded Soldiers」を設立した。これは「5人委員会」と呼ばれ、1863年2月に第一回会議が開催された。国際赤十字の誕生であった。1864年8月スイス政府は正式に国際会議を招集し、16カ国26人の代表が集まり、「ジュネーヴ条約—戦地軍隊に於けるケル傷者及病者ノ状態改善ニ関スル」1864年8月22日のジュネーヴ条約」が採択された。デュナンが提唱した「国際的協約の締結」と「国際的救護団体の設立」はこうして実現した。『ソルフェリーノの思い出』が書かれてからわずか2年後のことであった。デュナンは国際的な常置全権使節会議や最高裁判所の設置、武器の制限、「負傷軍人救護委員会」の平時の活動、特に自然災害時の活動などについても考慮していた。デュナンは、戦争による傷病兵の救護だけでなく、戦争そのものを回避する方策も考えていたと思われる。赤十字の創設については、アンリ・デュナン、木内利三郎訳『ソルフェリーノの思い出』（日赤出版普及会、1969年）、太田成美『赤十字の源泉を求めて』（日本赤十字社、1999年）、榎井孝『世界と日本の赤十字』（タイムス、1999年）など参照。
- 3) J. F. Hutchinson, *Champions of Charity*, Boulder: Westview, 1996 参照。同書でハチンソンは、初期の赤十字が戦争とともに拡大していったことを明らかにした。国家と二人三脚で戦争の準備と戦時の救護活動を行い、戦争をよりやりやすくするためにこそ赤十字が必要であったと述べている。
- 4) Arthur Marwick, *Women at War 1914-1918* (London: Glasgow, 1977).
- 5) ブライアン・エイベル・スミス、多田羅浩三・大和田健太郎訳『英国の病院と医療—二百年のあゆみ—』、保健同人社、1981年。原書は、*The Hospitals 1800-1948: A Study in Social Administration in England and Wales*, London: Heinemann, 1964.
- 6) Margaret Miers, *Gender Issues and Nursing Practice*, Houndmills and London: Macmillan, 2000 参照。
- 7) Anne Summers, *Angels and Citizens: British Women as Military Nurses, 1854-1914*, London and New York: Routledge and Kegan Paul, 1988. アン・サマーズは同書で女性たちの生き生

きした姿を描き、ケント州VADキャンプ活動に参加した女性の「キャンプで過ごしたあの日々の楽しかったこと！新鮮だったこと！ボランタリーな救助活動で結ばれた同志愛の中に国をひとつにしようとして築かれた友情があった」(p.258)ということばを紹介している。VAD活動は、多くの女性たちにとってそれまでの人生にない新鮮な経験であり、冒険であった。

- 8) 1915年、Joyce Dennysによって作成されたVAD募集のポスターには、大きな十字をバックにユニフォームに身を包んだ三人の女性と「緊急に要請されている」という文字とともに、任務として看護人、調理人、台所の手伝い、事務員、家事手伝い、病院雑役婦、洗濯係、自動車運転手の仕事がかかれている。また、フランス、イタリア、マルタ、エジプト、メソポタミア、オランダ、スイス、ロシアなどの海外任地もあげられている。このようなポスターが当時の女性たちを惹きつけ、VAD募集に大きな役割を果たしたと思われる。
- 9) 1864年に締結されたジュネーヴ条約をうけて、ヨーロッパ各国で赤十字社が創設されていった。イギリスにおいても、1870年7月に勃発した普仏戦争を契機に「イギリス全国救護協会」が設立された。協会は、Victoria女王をパトロンに、Prince of Walesを中央委員会議長、Christian王女を女性委員会会長、Lindsay大佐を総裁に、それぞれ決定した。活動方針の中では、後に問題となる軍との関係や他のボランタリー組織との関係、平時の活動についてはふれられていなかった(cf. Hutchinson, *op. cit.*, pp.238-239.)。
- 10) 1870年代から帝国主義的膨張政策をとったイギリスは、戦争準備のためにヨーロッパ諸国の赤十字運動に関心をもった。一方、イギリス軍の戦時医療体制が不十分であること、また、戦時ボランタリー救護組織の活動が重複かつ混乱していることも明らかとなっていた。こうして、戦時救護組織の改革が必要とされ、1898年7月8日に全国救護協会、聖ヨハネ救急車協会、軍看護予備隊の代表が陸軍医療部に非公式に招かれ、陸軍大臣参加のもとに会議が開催された。その結果、1898年11月23日、「イギリス赤十字

中央委員会」が設立された(cf. Hutchinson, *op. cit.*, pp.241-242.)。赤十字中央委員会は全国救護協会と異なり、陸軍省による公式承認を得た。しかし、全国救護協会が発展的解消をしたわけではなく、赤十字中央委員会と並列状態にあった。

- 11) 赤十字中央委員会が軍の公式承認を得た1899年10月に南アフリカ戦争が勃発した。この典型的な帝国主義戦争にイギリスは約50万の兵力を投入した。1902年5月まで続いたこの戦争で新しく設立された赤十字中央委員会に属する各組織も救護活動に参加したが、統制する機関がなく現地では混乱を招いた。何らかの調整機関が必要であった。1904年2月に起こった日露戦争は、戦時救護組織を統轄する唯一の機関、すなわち強力な赤十字の必要性を軍およびボランタリー救護組織に痛感させた。こうして、赤十字中央委員会がボランタリー諸組織からなる協議会の代表となり、1904年5月、「中央委員会」の名称を「中央協議会」とすることが決定された(cf. A. K. Loyd, *An Outline of the British Red Cross Society -from its Foundation in 1870 to the Outbreak of the War in 1914-*, London: British Red Cross Society, 1917, p.17)。
- 12) 「中央協議会」と改称された段階でも「全国救護協会」のA. K. Loydは限定的な活動を主張していたが、国際的状況は「国内唯一の赤十字社」の設立を求めている。そして、ついにA. K. Loydも新しい出発を支援をすることに同意し「全国救護協会」は「イギリス赤十字社」へと合併されることになった。(A. K. Loyd, *op. cit.*, p.18.)
- 13) *Ibid.*, p.19.
- 14) 「全国救護協会」のA. K. Loydは、一貫して戦時救護組織の大衆化に反対であった。彼は救護活動への大衆の参加に反対し、「ジェントルマンの組織」であることを理想とし、組織はそのメンバーと戦時傷病者のためのものであり、それが必要な時にのみ存在すべきだとした。ハチンソンは彼の立場を「貴族的パターンリズム」(cf. Hutchinson, *op. cit.*, p.247.)と呼んだ。
- 15) 1905年3月にバッキンガム宮殿で開かれたイギリス赤十字再編問題に関する会議でもA. K.

- Loydは赤十字の平時の活動に反対した。軍が合併計画の背後にあり、日本の赤十字活動のようにイギリスのボランティア救助活動を軍への服従的立場におくことになると主張した (cf. Hutchinson, *op. cit.*, p.248.)。
- 16) Anne Summers, *op. cit.*, p.246.
- 17) A. K. Loyd, *op. cit.*, pp.25-26.
- 18) 聖アンドリュー救急車協会はスコットランドにおける中心的チャリティ団体のひとつである。応急処置の訓練を行い、現在でも毎年、約2万人の人々に指導している。起源は1881年第一回の応急処置クラスが組織されたことに始まる。翌年、グラスゴーの中心地にある薬局に担架が設置され、一台の救急馬車が購入された。1882年には173件の事故や病気に立ち会い、救急隊として患者を病院へ搬送した。それ以後、スコットランドにおける救急活動の中心的役割を担い、第一次世界大戦中には、スコットランドにおける赤十字支部として活動した cf.<http://www.standrewdunf.co.uk/home.htm>, 2000年9月1日。
- 19) S. H. Best, *The Story of the British Red Cross*, London: Cassell and Comoany, 1938, p.99.
- 20) W. G. Macphersonは1900年のパリ万博における有賀長雄の日本赤十字社の活動報告を聞き、日本赤十字社に関する報告を作成した。彼はその中で日本赤十字社が平時によく訓練された要員を採用することで、戦時医療体制の強化に貢献したことを高く評価した (cf. W. G. Macpherson., *The Organisation and Resources of the Red Cross Society of Japan*, *Journal of the Royal Army Medical Corps* 6, 1906, p.467.)。
- 21) Cf. W. G. Macpherson, *Medical Services General History. Vol.1. Medical Services in the United Kingdom; and During Operations against Tsingtau, in Togoland, the Cameroons, and South-West Africa*, London: HMSO, 1921. p.26.
- 22) Anne Summers, *op. cit.*, p.238.
- 23) cf. *ibid.*, p.247.
- 24) A. K. Loyd, *op. cit.*, pp.27-28.
- 25) *Ibid.*, p.28.
- 26) 聖ヨハネ修道会の起源は、1050年イタリア商人がイェルサレムに聖ヨハネ宿泊所兼病院を建設したことに始まる。イギリスでは1100年 Clerkenwell に小修道院が建てられ、慈善救護院団員 (Hospitallers) が管理運営にあたった。1877年、聖ヨハネ修道会に所属する組織として聖ヨハネ救急車協会 (St. John Ambulance Association: S. J. A. A.) が設立され、救急部隊の訓練を行った。10年後には、修道会は聖ヨハネ救急車部隊 (St. John Ambulance Brigade: S. J. A. B.) を組織し、病人や事故による負傷者への応急処置及び運搬にあたり、同時に、戦時には軍医療部隊の補助的役割を果たした。メンバーはよく訓練され、海外にも出かけていき、「彼らなしにはイギリスは戦争にいくことができなかった」(E. Charles Vivian and J. E. Hodder Williams, *The Way of the Red Cross*, London: Hodder Stoughton, 1915, pp.221-225), といわれた。
- 27) 赤十字社は設立直後から、陸軍省に対してすべての戦時救護活動が赤十字社を通して行われるよう、すなわち、唯一の救護組織の統括機関としての立場を求めたが、それはかなわなかった。陸軍省からは最終的に次のような手紙が赤十字社あてに送付された。
- 1906.5.14. (抜粋)
- 海軍省および陸軍省は以下のことを承認かつ同意します。戦時における大英帝国およびアイルランドでのボランティアな援助の申し出は、すでに援助活動を行っている聖ヨハネ救急車協会と聖アンドリュー救急車協会以外は、赤十字社の機関を通じてのみ提供されません。この修正はあなたの方にとって同意できるものでしょうか。
- 陸軍大臣 E. D. Wardより赤十字社執行委員会議長 F. Treves へ
- (A. K. Loyd, *op. cit.*, p.20)
- すでに軍の戦時医療体制の補助的役割を行っていた聖ヨハネおよび聖アンドリュー救急車協회를さしおいて赤十字社を唯一の統括機関とすることは、両組織の合意を得られないだけでな

く、軍にとっても得策ではなかった。

- 28) 前述の1864年に締結された全文10条からなる「戦地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ状態改善ニ関スル条約(1864年8月22日のジュネーヴ条約)」は、1906年7月6日、「戦地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ状態改善ニ関スル条約(1906年7月6日のジュネーヴ条約)」として全面改定された。改定されたジュネーヴ条約は8章及び総則を含む33条からなる詳細なものであり、救護組織及び人員、赤十字と軍および政府の関係という二点に関して大きな変化があった。1864年のジュネーヴ条約では、救護にあたる人員について次のように述べられていた。

第2条 戦地仮病院及ヒ陸軍病院ニ於テ任用スル人員即チ監督員、医員、事務員、負傷者運搬員並ニ説教者ハ各其本務ニ従事シ且ツ負傷者ノ入院スヘク若クハ救助スヘキ者アル間ハ局外中立ノ利益ヲ享有スルモノトス(日本赤十字社編、『赤十字条約集』、日本赤十字社、1958年、1ページ)。

ここには戦地仮病院と陸軍病院に任用された救護員が救助の仕事に携わっている間は、中立の立場を維持できることが明記されている。また、7条では救護にあたる者は「白地に赤十字」の標章をつけることも決定された。しかし、救護組織と軍との関係や公式承認の是非に関しては明確に記載されていなかった。1864年のジュネーヴ条約締結後、世界は戦争の時代へと突入し、相次ぐ戦争と寄り添うように赤十字社が各国に設立されていき、1900年には30カ国に赤十字社が存在した。科学技術の発展によって殺傷能力を増した兵器は多くの犠牲者を生み出し、「ジュネーヴ条約」の改定は緊急の問題となっていた。このような状況の中で改定された「1906年のジュネーヴ条約」では、救護組織と軍や政府との関係は第10条に明確化されることになった。

第10条 本国政府力適法ニ認可シタル篤志救恤協会ノ人員ニシテ軍隊衛生上ノ移動機関及固定営造物ニ使用セラルモノハ前条ニ掲ケタル人員ト同一ニ見サルヘシ但シ該人員ハ陸軍ノ法律規則ニ服従スヘキモノトス各国ハ其ノ責任ノ下ニ在リテ軍隊ノ衛生勤務

ニ幫助ヲ与フルコトヲ許可シタル協会ノ名称ヲ平時ヨリ又ハ戦争開始ノ際若ハ戦争中何ノ場合ニモ之ヲ有効ニ使用スルニ先チ何ノ一方国ニ通告スルヲ要ス

(日本赤十字社、前掲書、5ページ)。
ここで、篤志救恤協会すなわち赤十字社は政府によって認可された団体であること、人員は陸軍の法律規則に従うべきこと、救護組織の名称を交戦相手国に通告することが明記された。また、第11条では協会はあらかじめ本国政府の承認を得なければならないと規定された。「イギリス全国救護協会」に代表されたような軍や政府から自立した救護活動をめざそうとした動きは、「ジュネーヴ条約」改定によって国際的にも不可能になった。戦時救護活動はこうして軍や政府の管理下におかれていったが、戦争の巨大化に伴う必然であった。

- 29) 1905年のイギリス赤十字社の再編直後から、陸軍省と赤十字社の間で多くの手紙が交換された。赤十字社から「赤十字の目的」について(1905.10.26.)。軍から「赤十字評議委員会及び執行委員会の議事録の閲覧要請」(1905.11.28.)。赤十字社から「戦時にはボランタリーな救護活動は赤十字のみを通して提供されるよう要請」(1906.5.2.)。軍から「5月2日付け赤十字社の手紙に対して聖ヨハネ及び聖アンドリュース救急車協会を除く修正案」(1906.5.14.)。(cf. A. K. Loyd, *op. cit.*, pp.21-25.) 赤十字社からも修正案を出しているが、最終的には軍の意向通りになっていった。それは戦時救護活動という赤十字社の存在目的からして避けられないことであった。特にジュネーヴ条約改定以降、赤十字社は軍の指揮下に入らなければその活動ができなくなり、軍の主導権のもとでの協力関係が確立した。

30) Cf. A. K. Loyd, *op. cit.*, p.27.

31) Anne Summers, *op. cit.*, p.250.

32) *Ibid.*, p.251.

33) Cf. *ibid.*, p.251. アン・サマーズは「私たちは女性のための小さな部隊をつくることを決心しました。...彼女たちは応急手当の方法を学ぶのにとっても熱心です...。」というスコットランドの

一女性からエリザベス・ホールデンあての手紙を紹介しているが、イギリス全土でこのような女性たちの活動が活発に行われた。

34) *Ibid.*, p.251.

35) Cf. *ibid.*, p.252.

36) *Scheme for the Organization of Voluntary Aid in England and Wales*, London: HMSO, 1909.

37) *Ibid.*, pp.4-10.

38) Hutchinson, *op. cit.*, p.352.

39) 南アフリカ戦争でイギリスは約2万2000人の兵士を失ったが、そのうち、戦闘及び事故で死亡した者5774人に対し、怪我や病気または劣悪な医療のために死亡した者は1万6168人に達した (cf. Thomas Pakenham, *The Boer War*, New

York: Random House, 1979 p.287.)。戦闘行為そのものより医療体制の不備で死亡する兵士の方が圧倒的に多かったのである。軍がいかに戦時医療体制の改善を求めていたか明らかである。

40) W. G. Macpherson, The Role of Red Cross Societies in Peace and War, *Journal of the United Service Institution* 1, 1907, p.1357.

41) *Ibid.*

42) Anne Summers, *op. cit.*, p.253.

(本稿は、国民医療研究所および全日本赤十字労働組合連合会による「赤十字の歴史と国際比較に関する共同研究プロジェクト」の研究の一部をまとめたものである。)

Establishment of Voluntary Aid Detachments (VADs) by the British Red Cross in 1909

Ayako KUROKAWA *

Abstract: Voluntary Aid Detachments (VADs) were established by the British Red Cross under the guidance of the War Office with the aim of providing medical care to soldiers who had been injured or become ill during the First World War. Many people joined VADs voluntarily. Women, who had been given few opportunities to participate in social activities, played an especially active role in VAD activities so that they could “serve their country.” They contributed significantly to medical services during the war. This report will discuss the nature of the relationship established between the War Office and the Red Cross in forming VADs: more specifically, while reviewing the process of establishing VADs and their purposes and actual conditions, it will be elucidated how the Red Cross and other voluntary organizations developed cooperative relations with the government and the military in promoting voluntary activities.

Keywords: the Red Cross, the First World War, voluntary organizations, medical services during the war, women's activities during the war

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University